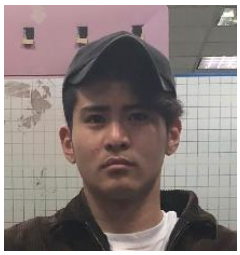
SUSAP 東華大学プログラム

2020 年 2 月 20 日～3 月 22 日

メンバー紹介



団長

松下　壽智

経済学部経済学科２年

海外で日本語が通じない環境の中、英語を学ぶことができたのは自分にとってとても価値のある経験になりました。

副団長

杉安　秀真

理工学部機械システム工学科２年

自分の英語力の低さを海外で思い知り、精進したいと思って参加。スピーキングに積極的にトライすることでコミュニケーションの大切さ、難しさを学べた濃い一か月にすることができた。

石丸　あかね

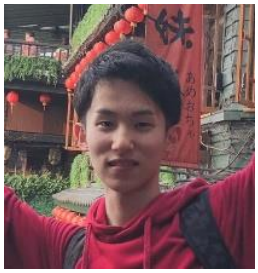
経済学部経営学科２年

英語学習と異文化に触れるため留学を決意しました。自然豊かな東華大学の中でやさしい先生方と友達のおかげでのびのび生活することができました。

稲永　佳織

理工学部機能物質化学科２年

自分の英語がどのくらい海外で通用するのか知りたかったので、このプログラムに参加することにした。また、日本とは異なる文化を持つ国へ行き、異文化への理解を深めたかったのも理由の一つである。



田中　謙慎

医学部医学科２年

海外で英語や中国語の環境に身を置いて勉強したいと思い参加しました。刺激的な一か月でした。

田中　みなみ

教育学部小中連携教育コース初等教育主免許社会科２年

英語のリスニング・スピーキング力を鍛えたい、海外に行きたいなどの理由から参加。たくさんの人と関わっていく中で中国語にも興味を持った。

石塚　快

理工学部理工学科物理学コース１年

学内で留学生との交流を重ねる中で、英語能力の向上だけでなく視野を広げる意味でも留学の必要性を感じたので参加した。また、実際に英語を必要とされる場面でどれだけ使いこなすことができるか確認したかった。

内田　怜那

農学部生物自然科学科１年

日本ではあまりできない英語を実践的に使う生活をしたい、様々な国の学生と交流したい、大学生のうちに今しか出来ないことをしたいという理由で参加しました。一番思い出に残っていることは夜の九份を見たこと。

末松　栞

経済学部経済学科１年

様々な国の人との交流を通して、日本では感じられなかったことや考えなかったことに出会い、自分の考え方や価値観が広がりました。

中山　真那伽

農学部生物自然科学科１年

スピーキング力を向上させるために応募し、一か月の研修で台湾人の英語力の高さ、英語の重要さを再確認しました。帰国後はこれまで以上に英語学習に励み、留学に再チャレンジしたいです。

プログラム概要

【期間】2020 年 2 月 20 日～3 月 22 日（32 日間）

【留学先】国立東華大学

花蓮県寿豊郷志学村大学路二段 1 号

【内容】

2 月下旬から始まる学期のうち冒頭の 1 か月間、東華大学の学生とともに英語で開講されている授業を受け、休日や空きコマを利用してバディやクラスメートなどの様々な台湾の学生と交流をするプログラムである。このような活動の中で、参加者の多くは英語力の向上、異文化理解など様々なスキルアップを目指すことを目標としていた。

東華大学について

国立東華大学は、台湾東部の花蓮縣に位置する国立大学で、人文社会学部、理工学部、経営学部、教育学部、芸術学部、原住民学部、環境学部、海洋科学学部の８つの学部で構成されている。10000 人以上の学生が在籍しており、台湾だけでなく、外国からも学びに来ている学生がいる。

キャンパスは山に囲まれた立地で、構内には大きな湖があった。大学の敷地面積は佐賀大学本庄キャンパスの約 9 倍であり、自然豊かでのびのびとした環境の中で勉強に励むことができた。

大学構内にある広大な湖

バディとの交流

このプログラムでは、1 人につき 1 人もしくは 2 人のバディがつき、私たち佐賀大学生は彼らに台湾での生活を送る中で様々な手助けをしてもらった。私たちは、バディと一緒に昼食や夕食をとったり、休日に台北や太魯閣などの観光地へと足を運んだりしてバディとの交流を楽しんだ。

バディと一緒に行った夜市の様子

授業

授業は、月曜日から金曜日の週 5 日の中で各自 20 時間を超えるように履修し、一人一人が各々の時間割で行動していた。東華大学では英語での授業の数が非常に多かったため、英語のコミュニケーションについての授業だけでなく専門的な授業を英語で受講することができた。

クラスの人数については、1 つのクラスにつき 20～40 人程度という少人数が基本であった。

英語コミュニケーションやオーラルトレーニングの授業では、ダイアログやモノログ、ディスカッション、プレゼンテーションを行った。授業中は、ただ座ってじっと話を聞くのではなく、先生の説明から得られた情報を自分の言葉で他人に説明したり他人に話しかけに行ったり、クラス全体の前で発言したりするなど積極的に参加する態度が求められた。

台湾の国柄、文化

台湾では皆、人目を気にせず、各々が好きなように過ごしているように見えた。大学内外では多くの男女が仲良さそうに一緒に行動している光景をよく見かけたが、彼らを気にする人もあまりいないようであった。

また、台湾ではごみの分別がしっかりされていた。特に、お惣菜パックなどのプラスチックと洗濯物干しなどのプラスチックが分別されていたこと

に驚いた。スーパーではビニール袋が有料だったので、各自がマイバックを持ち歩いていた。コンビニのレジでも割り箸やお手拭きなどが一切渡されず、資源の節約が徹底されていた。

留学の費用（今回の場合）

●留学開始前と留学開始後 1 週間に支払った費用

授業料	0 円
往復航空券	57270 円
海外旅行保険代	10840 円
寮費(FREE Wi-Fi 代込み)	約 16850 円
マットレス、枕、スリッパ代合計	約 4750 円
Wi-Fi ルーター、SIM カード代	人それぞれ

今回はコロナウイルス感染拡大の影響で様々なスケジュールが変更されたため、上記の費用に加え、往路の台鉄料金(約 1650 円)と特別授業コース代（約 8130 円）を支払った。

●日用品

主に東華大学周辺での物価について紹介する。

台湾の通貨の単位は元（台湾ドル）である。レートについては、1 元＝3.66 円である。(2020 年 3 月現在)

	宜徳(百貨店)	コンビニ	パン屋
600mL 水	7～15 元		
カップヌードル	約 30 元	27 元～	
食パン（12 枚）	35 元～		35 元
マットレス	790 元～		
枕	150 元～		

パン屋などの小売店、レストランなどではクレジットカード使用不可のお店が多かった。現金不足にならないためには、十分な現金を持参する、キャッシング機能付きのクレジットカードを持参するなどの対策が必要である。

食事

台湾では外食文化が栄えているため、日本での外食よりも安く食事をすることができた。大学周辺で食事をとるとしたら、大学内の学食、学内のコンビニエンスストア、大学近くのレストラン街（志學街）のうちのいずれかである。ごく少数派ではあったが自炊をする学生もいた。

予算については個人差があるが、朝食、昼食が各 30～70 元、夕食が 70～150 元くらいであった。タピオカミルクティーやかき氷などを除けば、私の 1 か月の食費は 2 万円程度であった。

屋台フードや、鍋の具材のなかには日本では食べない物があるので、不安であれば食事は台湾の学生と一緒にとることをお勧めする。

志學街のデザート屋さんの豆花（トーファー）

まとめ

このプログラムの参加者は、今回が初めての留学、または初めての海外だという人が多かった。そのため、戸惑うことが多く、留学当初は何をするにも勇気がいったが、1 か月後には、英語力向上、海外の友人を作ることなど、各自で立てた目標を達成できていたように思う。さらにコロナウイルスの影響で様々なスケジュールが変更されるなかで不安や心配が増した人も多かった。しかし、このような状況においてどのような行動をとることが正しいのか模索して過ごすことができた。今回のプログラムで、語学面でも人間性の面でも成長することができた。私たちは皆、この経験をこれからに活かそうと思っている。

「東華大学で学んだこと」

経済学部経済学科 2 年　松下壽智

私は東華大学での 1 カ月間の留学を通して様々な経験をし、そこから学ぶことができた。東華大学では、2 人一部屋の寮ですごし、平日は授業に参加して休日は台湾の生徒と近くの湖や海岸、市内に散策をした。

ここからは、経験したことをカテゴリー別に挙げていき、感じたことに関して考察を深めていく。

① 授業内

台湾の英語の授業では、文法や単語と言った基本的なことはやらずに、とにかく英語で話す機会が設けられている。英語で自分の興味のある分野に関してのプレゼンテーションでパワーポイントを用い 20 分する授業や、授業開始直後に生徒を全員起立させ、英語で周りとコミュニケーションを取らせる授業もある。そういった授業の中、台湾の生徒は積極的に周りと意思の疎通をはかっていた。私は当初、文法のミスや発音の正確性に不安を抱いていたため、言葉が出てこず、自ら話しかけることを躊躇っていた。しかしながら台湾の生徒の間違いを臆せず話している姿をみて、私も積極的に話すことを決めた。授業内で積極的に発言できるようになった頃には、授業外でも自分から台湾の人に話すことができ、結果的にたくさんの友人を作ることができた。自ら積極的に動くことで相手は受け入れてくれ、たとえ拙い英語を私が用いようと距離を縮めることができると言うことを学んだ。ここから、大切なことはコミュニケーション能力だと考察する。言語力も大切であるが、コミュニケーション能力が高いとそれを補えることがこの件を通してわかった。

② 台湾での日常生活

台湾での生活について述べていく。台湾で過ごしている時は、毎食、外に食べに出た。というのも、大学付近の通りにレストランが並んであり、とてもアクセスがしやすいためである。いつ行っても、レストランの中にはおそらく学生であろう集団が話していた。基本的にはメニューの書かれたオーダー用紙に自分で食べたいものに印をつけ、店員に渡すスタイルだったが、iPad でオーダーを取る店も少なくなかった。台湾はゴミの分別に力を入れているようで、リサイクルできるもの、プラスチック、紙類、ダンボール、など細かく分別していた。そして台湾の方もその規則を厳守している様子が伺えた。生活に関して、日本と比べて比較的不便に感じたのがトイレである。水圧の関係から詰まりを防ぐために、トイレットペーパーが備え付けられてない場所や流せない場所があったため、衛生紙を持参するか近くに備え付けのゴミ箱に捨てるかであった。菌の繁殖や、匂いの面でも衛生的に良くないと感じた。しかし、駅や台北といった中心都市ではトイレットペーパーをそのまま便器に流せる場所があったため、次第に郊外の方でも普及されるのではないかと考察する。交通に関しては、バイクの普及率が高いように感じた。また、悠遊カードが普及されていてバスや電車はとても便利に利用ができる。交通費も安いため移動は日本よりも手軽にできる。

台湾での日常生活は全体を通してみても、暮らしやすいものだと感じた。トイレの衛生環境や交通規則の遵守には改善の余地がありそうではあるが、ゴミの分別に対する意識や、悠遊カードの制度など日本人が見習うべき点も多くあった。少し違った視点からの考察になるが、同じアジア圏内でなおかつ日本が統治したことがある国からでも十分に学べることがある。このことを抽象化すると、「どんな物事からも学べることがある」と解釈できる。あらゆる事柄から、自分にとってプラスになる事を学び、身につけていきたいと感じた。

③ 自由時間

土日を含めた自由時間で私は様々な人と出会い、

様々な経験をした。

東華大学内には様々な運動施設があり、そこにはたえず人が出入りしていた。私はそのなかで外のバレーボールコートでバレーボールをしている集団に参加した。彼らはきたる学内での大会に備えて練習に励んでいる様子で、見知らぬ私を快く受け入れ、練習に参加させてくれた。大学内では一つの種目でも複数のチームがある事を教えてくれた。男女混合で行なっているチームも少なくなく、チームによっては人数の不足が問題のところもあった。台湾の生徒は優しく、練習が終わった後も声をかけてくれ、食事に誘ってくれた。ほとんどの生徒が日本の漫画に興味を持っていた。日本人と交流を持つ機会が少ないためとても貴重だと話していた。やはり台湾の方は日本に対しての関心が強かった。しかし、これは単に歴史的背景だけから来るようなものではないように感じた。現代の日本のアニメや漫画に興味を持っている台湾の方にたくさん会ってそう感じるようになった。日本の歴史を学び伝統を伝える事の大事さと共に、今の日本の文化や新しい流行、技術、分野に関しても一定の知識が必要だと感じた。

④　1ヶ月を通しての感想

初めての環境下での暮らしを経験でき、いくつかのトラブルを解決出来たこと、英語でコミュニケーションを取れたことは自分の中で自信になった。誰にでも臆せず話せるようになったことや、目標の一つでもあった「友人を沢山つくる」が達成出来たこともこの留学の成果の一つとしてあげられる。台湾の人は異なった価値観、文化、境遇を受け入れてくれる優しく思いやりのある方々だと思った。また、英語はコミュニケーションのための一つの道具であり、自分の意思を伝える事が何より重要であるという事を学んだ。日本でも英語を使ってコミュニケーションを積極的に取っていく。一ヶ月間で本当に多くの経験をすることができた。今後はこの一ヶ月で学んだ積極性や自主性を英語の面だけでなく、日常生活に応用し活かしていきたい。

このような貴重な経験が出来たのは、国際課の方々の支援があったからです。本当にありがとうございます。また、1ヶ月間授業に参加することを許してくださった現地の先生方、積極的に話してくれた現地の友人、台湾留学を受け入れてくれた親にも感謝しています。様々な方々の支援とご協力のもとで学べたことを忘れずに今後に活かしていきます。

「バレーに参加した時の写真」

コミュニケーションの重要性

理工学部機械システム工学科２年　杉安秀真

今回、この SUSAP 留学プログラムに参加させていただき、僕は台湾の東華大学に行かせていただきました。平日はビジネスや微積、線形代数などの専門科目をすべて英語で受けて貴重な時間を過ごし、休みの日や学校終わりには台湾の様々な食文化に触れたり、台北や九份を台湾人の友達と訪れたりするなどしてこの１か月、非常に有意義に過ごすことができた。これから、僕がこの留学を通して考えたこと、得られた事を記述していこうと思う。

まず留学の時間の中で最も大きな割合を占めた授業についてだ。結論から簡潔に述べると、かなり

意識の高い学生が多くただただ感心するばかりであった。具体的には、授業中であっても分からない部分や疑問に思ったことがあれば、席に座ったまま大きな声で教授に質問をしている姿や、授業後に質問に行く姿が素晴らしい。特に前者の、自分の席から授業中質問をする姿は日本の大学ではなかなか見られないと思う(他大学は分からないが)。さらに授業後に質問する学生より、授業中に質問している学生の割合が高かった。これは非常に素晴らしいことだと個人的に思う。なぜなら、日本人の多くは、分からない所が授業中やアルバイト中など様々な場面ででてきたとき、質問を人前でするのが恥ずかしいと考え、後から質問を個人的に先生や上司にしに行くケースが良くみられる。しかしこれでは、疑問に思った本人と先生しか質問を共有できない。それに対して人前で質問をするという行為は、かなり効率の良いアクションである。誰かが質問した際、『あ、俺もそれ疑問に思っていた』と感じた経験を多くの人がしたことがあるだろう。このように誰かが質問してくれたことで本人だけでなく周りにいる人にも利益をもたらすと共に、既にそのことについて理解していた人にとっても復習の場を設けることになり、結果利益をもたらす。

次に授業の質についてだ。とにかく素晴らしいのは、ディスカッションやプレゼンテーションが授業で頻繁に行われるということだ。特にディスカッションを授業で行うというのは僕にとっては新鮮なものであった。さらにそのディスカッションは中国語でなく英語で行われるため、台湾の学生にとっても容易なことではない。ディスカッションのテーマは、職場英語であれば自分の働きたい職場環境であったり、就職する際に重視する条件であったりと様々で、討論を行った。この訓練を行うことで、様々な知識や価値観だけでなく英語でのコミュニケーションをとるスキルも身についていく。なんと素晴らしいことであろう。学生が授業に対して意識が高いのは、文化という二文字で片付けられるものではなく、こういったディスカッションなどの場で意見を言うことに慣れているからかもしれないとも感じた。

次に、コミュニケーションの大切さについてだ。僕はこの一か月大学で新しくできた友達とはもちろんだがすべて英語でコミュニケーションをとってきた。今まで英語はたくさん勉強してきたが、スピーキングの勉強はほとんどしてこなかったので、かなり苦労した。僕は現地の英語が流暢に話せる学生複数人に、どのようにして勉強すればスピーキングは上達するかと尋ねた。するとみんな口を揃えて、『とにかく話すこと、トライして慣れるしかない』と言われた。言われた通り、この留学期間とにかく機会があれば英語を使っていくうちに気付いたのだが、僕たち日本人が思っている以上に、文法を細かく気にして英会話をする必要はなかったのである。大事なのは伝えようとする気持ちと基本的な語彙力と文法で十分であると気付いた。僕が履修した授業の一つに、『Inter Cultural Communication』という授業があったのだが、その授業中、『日本語では男性と女性で自分の呼び名が違ったり、敬語や丁寧語が存在したりするんですよ』と不思議そうに話されていた。確かに英語の世界では、～します、～するはどちらもＩwill do～で言われるのである。日本語は英語と比べて明らかに文法や言い方が細かく、たくさんの言い回しがある。それ故に僕たち日本人は、例えば【『お、これ気になるなぁ』って英語で何て言うのだろう】というようにいちいち細かい文法の差異までも英会話で表現しようとしてしまいなかなか英語が話せないということが分かった。実際は、興味がある、関心がある、気になるはすべて『be interested in～』で言われるのであり、なんら難しい言い回しは必要ないのである。

この 1 か月の経験を生かして、残りの大学生活を後悔無く過ごしていきたい。国際課をはじめ、サポートして下さった皆様ほんとうにありがとうございました。

特別プログラムで琴の体験をした

留学から得られるもの

経済学部経営学科２年　石丸あかね

私がこの留学を決意した理由は、いましかできない経験をしたいという思いがあったからだ。この一ヶ月間の台湾留学を通して、たくさんの新しい発見と出会いがあった。

一つ目は、台湾の文化に触れることができたことだ。原住民族の生活、民族舞踊、琴、書道の四つの分野に分かれて学習した。その中で、私が一番印象に残っているのは、原住民族の民族舞踊である。カラフルな衣装と、独特な踊りや音楽を持つことに特徴がある。私は、この華やかさや集団舞踊から、様々な国からの支配を受けてきた台湾が、独自の文化を守り続けようとする姿かのように感じた。

二つ目は、大学で授業を受けることができたことだ。東華大学での授業は、先生と生徒との距離感が非常に近く、常に生徒が主体的であることに、日本の授業形態との差を感じた。また、現地の学生とのグループディスカッションを通して、英語で自分の意見を述べること・コミュニケーションを持続することの難しさを実感した。さらに、現地学生のプレゼンテーションは率直に、ただかっこよかった。簡潔明瞭なスライドと、身振り手振りをしながら視聴者とアイコンタクトをとる姿勢は、今後、私が授業でプレゼンをしていく上で手本にしたいと思った。

三つ目は、現地学生との交流だ。自分のバディだけでなく、友達のバディとの昼食や夕食に便乗したり、授業で知り合った台湾人学生と出かけたり、授業以外の面でも充実した日々だった。留学が始まったばかりの時は、会話中、私が英語につまずいて黙ってしまう場面が多くあった。そのたびに、友達は、「大丈夫だよ、ゆっくりでいいよ。」と、私の言葉を待ってくれた。そのおかげで、英語に対して恐怖心を持つことなく、会話を続けることができた。次第に英語に慣れていき、会話が続くようになってきているという実感を強く持つことができた。また、日本に関心があり、日本語を勉強している学生も多く見受けられた。その中で、“いただきます”や“お願いします”などの言葉の意味や、浴衣や着物についての日本文化について聞かれることがあり、話していく中で、私自身、日本の良さを再確認することができた。

最後に、この一か月間の留学と同時に、初めて親元を長期間離れるという経験もした。日頃は、実家生活のため、両親に頼ってしまいがちだが、留学期間中は自分で決め、自分から進んで行動することができ、人として大きく成長できた。台湾留学に行かせてくれた両親と、それを手助けしてくださった佐賀大学の先生方に、深く感謝します。ありがとうございました。

台北で食べた有名なマンゴーかき氷

「留学を終えて」

理工学部機能物質化学科２年　稲永佳織

私にとってこの東華大学プログラムが初めての留学だったので最初はとても不安だったが、とても濃い時間を過ごし、日本ではできない多くのことを学び、経験することができた。慣れない生活で大変なこともあったが、とても良い留学にすることができた。これから、この留学で学び、感じたことを３つのテーマに分けて述べていこうと思う。

１つ目は英語について。私は TOEIC や英語の授業以外で英語に触れる機会があまりなく、今まで英語を使って長い間コミュニケーションをとったことがなかったので、留学が始まった当初は英語を聞き取るのに精一杯だったが、バディや現地の学生との会話、授業中も全て英語を使って行ったので、徐々に自分の英語力が伸びているのを実感することができた。台湾の学生はとても英語が堪能で、英語での会話も流暢だったのでとても驚いたが、私が言いたいことを伝えるのに時間がかかっても待ってくれたりなんとか理解しようとしてくれたりしてくれ、とても優しく接してくれた。それもあって、私は英語を話すことができ、英語力を伸ばすことができたと思う。今までは机の上で英語を勉強することが多かったので、人とコミュニケーションをとって英語を勉強するとより効果的であることを実感した。会話の中で出てきて聞いたことはあるけど意味を思い出すことができなかった単語や、知らない単語を後から意味を調べておくと、私はあまり単語を覚えるのが得意ではないのにもかかわらず、次の会話に出てきたときに意外と覚えていてとてもびっくりした。机に向かって淡々と単語を覚えるよりも、人と関わる中で単語を身につけていった方が早く覚えることができたので、今後の勉強方法を見直していくべきだと思った。今回の留学に行って、自分の英語で最もこれから注意して勉強していくべきだと思ったことは発音だった。自分では気づかないうちに日本語に近い発音をしていたことがあって、それだとなかなか相手に伝わらず聞き返されたことがあった。今までは日本人と英語で話すことが多かったのでそのような発音でも通じたが、他の国の人と話すときは正しい発音でないと伝わらないことに気づいた。今後は発音も意識して練習していきたい。今まで、私の中で英語は TOEIC など就職の時に役に立つものという認識だったが、この留学に参加して人と関係性を築くためのものであることを実感することができた。

２つ目は東華大学での授業について。私はこの１ヶ月英語と理系科目の授業を受けていた。私が日本との違いを感じたところは、生徒が積極的に授業に参加していたことだ。先生の話を聞いているだけの日本とは違い、授業中に発表したり、先生に対して質問したり、生徒間でコミュニケーションをとっていた。一方通行の授業ではなく、人と関わりながら勉強をしていた。私も授業に参加していて、とても楽しかったしおもしろかった。特に英語の授業は日本とはかなり違っていて、台湾では先生の英語を話す速度が速かったり、生徒同士で英語を使って話したり、英語で動画を見るなどで、聞く力と話す力を養う授業だった。日本では椅子に座って先生の話を黙々と聞き、教科書を使って勉強することや、書く力を養う授業が多かった。そのような授業だと、いざ英語を使って話すとなると

なかなか難しいので、日頃から英語を使って話す事を授業で行うことで、そのような状況になっても焦ることなく英語でコミュニケーションをとることができると思う。

３つ目はこの 1 ヶ月の台湾での生活について。この 1 ヶ月はとても楽しく充実していた。学校の近くのレストランに行ったり、バディと一緒に台北へ旅行に行ったりとたくさんの思い出を作ることができた。食事の面では、特に苦労することなく日本人の口に合う料理がたくさんあって、いつも食事の時間がとても楽しみだった。私が日本との違いを感じた所は、コンビニやスーパーでレジ袋、学内ではストローやお箸を貰うことができなかったことだ。台湾は日本よりも環境問題に対する意識が高く、日頃から対策をしているのだと思った。台湾で私が 1 番苦労したことはトイレだった。日本はどこのトイレに入っても大体綺麗でトイレットペーパーもあるが、台湾はほとんどのトイレにトイレットペーパーがなくあまり綺麗ではなかった。

最後にこの留学を通して、私は英語に対する意識を変えることができ、日本ではできない経験を通して台湾と日本それぞれの良いところを知れ、とても充実した１か月を過ごすことができた。この留学は私にとってかけがえのない経験となったので、今後の人生に活かしていきたいと思う。

東大門夜市での一枚

台湾での１ヶ月留学

医学部医学科２年　田中謙慎

今回の留学は私にとって二回目の留学であり、前回は中国の杭州市に 2 週間滞在した。それに比べて台湾に 1 ヶ月滞在した今回の留学は長期且つ体調を崩してしまった事も重なり苦労する事も多かった。留学にストレスは付き物であると承知したつもりだったが、花粉症、気温差の激しい気候、中々眠れないことなど相当に堪えた事は事実である。自身の体調管理の甘さを痛感した 1 ヶ月でもあった。また新型コロナウイルスの影響により台湾ではあちこちで徹底的な対策が行われていたのは普段の様子とは異なるものであった。

授業では正規の大学生と共に受けた。主に英語に関する授業を選択したが、東華大学生の英語能力は殆どの学生において圧倒的に私達より上であった。流暢に発音し、聞き取り能力も問題ない。英語でのプレゼンテーションも滞りなく行われ、日本の大学生の大多数がこのようにはいかないであろうと感じた。また英語以外の専門科目も英語のみで行われるクラスが多数あり、専攻が英語以外の人も問題なく受けていた。少なくとも東華大学では国際化が進み、多様な国の人々と関わる事ができた。授業ではついていく事が精一杯であった。英語が上手く話せなくて心が折れかけた事も数回あり落ち込みもしたが、その反面大きな悔しさも感じた。こうした経験こそが成長には必要であり留学の醍醐味であるとも思う。

授業以外の日常生活ではずっとバディと共に過ごしていた。最終的に彼とは親友と言えるぐらいに仲良くなる事ができた。放課後は夕食を共にし、休日には花蓮市や台北市にも出かけた。彼は日本の事が大好きでお互いに日本語や中国語を教え合ったりもした。全く育ちや文化も異なる私たちであったが、互いに尊重し合う事ができたので 1 ヶ月間一緒に楽しく過ごす事が出来たのだと思う。

会話は英語であり、彼の方が英語は上手であったが彼は私の拙い英語に文句を言わずに常に懸命に付き合ってくれた。英語を話している時はいつもどこか不安な思いがあるが、彼と話している時のみ本当に英語での会話を心地いいと感じていた。安心して英語を話せる環境を彼が作ってくれていた。あらゆる点で彼には本当に感謝している。日本で再び会う約束をしているので、その時に恩を返すつもりである。

台湾と中国を比較して印象深いのが、街のあらゆる所で日本語や日本製品など日本に関係のあるものが沢山存在している事である。事前研修で読んだ「さよなら再見」で述べてあった通り日本の経済的な侵略を実際に肌に感じた。しかしこの事をどう考えるかは人によるが、私が出会った台湾の人々は好意的で日本製品や日本の事が好きな人ばかりで大変友好的であった。台湾における日本の影響力は私の想像以上に未だに大きい事を実感した。台湾に行く日本人は歴史的背景を一度勉強していく必要性も感じた。現在も両国が良好な関係を築く事が出来ているのは台湾の人々の思いやりのある温かい国民性故である。日本人にとって台湾は留学先として適した素敵な国であると思う。

バディとの写真

「台湾留学の良さ」

教育学部小中連携教育コース初等主免専攻社会科２年　田中みなみ

私は東華大学プログラムに参加して、日本ではできないことをたくさん経験した。これから、今回の留学の成果を目標に即して述べる。

①　失敗を恐れずに英語を話すことの重要性

台湾では、失敗を恐れずに積極的に英語で話そうとする学生が多かった。授業におけるプレゼンやディスカッションだけでなく、休み時間や食事の際などに私たち日本人と会話する時にも、積極的に英語を使って話をしてくれた。彼らの中には英語が得意で私が聞き取れないほど速く話す学生もいたが、その他の多くの学生に関しては特にリスニング、スピーキング力が私より優れているといった印象をもった。ここで、相手が話している英語によくよく耳を傾けると文法や単語を間違っていることもあったが、それでも、コミュニケーションとして成り立っていた。ではなぜこのように台湾の学生が積極的に英語を話そうとするのかについて考えてみたところ、その答えは授業にあったようである。

それは Andrew 先生の授業である。この授業は、あるお題についてクラスメートと 3 分間のダイアログをすることから始まり、4 人グループで 10 分間会話を続けたり、1 人で 1 分半話をするモノログをしたりした。つまり、授業中の 100 分間終始クラスメートと会話をし続けた。学生が会話を続けられない様子を見て先生は笑顔で“Relax,　Breathe, Don’t　be afraid of making mistakes”と言って何回も励ましてくれた。この言葉を聞くたびに、間違ってもいいから積極的に話そうとすることが大事だと思うことができた。このようにして練習を重ねるうちに 3 分間や 10 分間を短く感じるようになった。この授業を受けてから、休日に友達と会話する時も、完璧な英語で話そうと考えこむ前に、間違ってもいいから話そうという心意気で話すことができるようになった。

②　台湾の学生とのコミュニケーションについて

台湾の学生は日本についてとても興味を持っていて、中には日本の歌手について私より詳しい学生もいた。3 分間のダイアログの際、日本から来た留学生だということを伝えると、興味津々な様子で日本について様々なことを尋ねられた。このことから、普段自分から積極的に会話をしづらい環境にいる人にとって、台湾はとても良い留学先だと思った。

③　言語学習のモチベーション向上

私は、英語のリスニング、スピーキング力を伸ばすためにこのプログラムに参加した。この 1 か月を通して、英語学習に対する私のモチベーションが上がった。その理由は大きく分けて以下の二点である。

第一に、ボランティアとして日本語の授業に参加した際に、台湾の学生が真剣に日本語の勉強をしている様子に感化され、自分ももっと英語の勉強を頑張ろうと思ったからである。また、たくさんの台湾の学生と関わっていく中で、私の英語のミスを指摘してくれる友達、私の英語を褒めてくれる友達を持つことができたことも、今回の留学に行って良かったと思えることの一つである。

第二に、台湾の学生がとても親切に中国語を教えてくれたこと、看板や飲食店のメニューをはじめとして様々な中国語が周囲にあったことなどから、中国語についても勉強したいと思うようになった。

●おわりに

今回のプログラムはコロナウイルスの影響により東華大学の始業日が延期されたためバディと交流する期間が約１０日間短くなったことや、授業の際にマスクを着用した状態でのコミュニケーションを余儀なくされたことなど、様々な困難があったが、その中でもたくさんの友達と話したり様々な場所を訪れたりしてとても充実した日々を送ることができた。留学を許してくれた親や、奨学金制度、応援してくれた友達などに感謝し、またチャンスがあればぜひ参加したいと考えている。

バディの部活に一緒に参加したときの写真

「この留学を通して得たこと」

理工学部理工学科物理学コース１年　石塚快

〈はじめに〉

私は英語のスピーキング能力向上と専門科目の講義に興味があったため、SUSAP2020SPRING 東華大学プログラムに参加した。そして当初の目標のほかにも様々な体験を通して視野が開けたことで、様々な新しい知見を得ることができた。特に Covid-19 に対する日本との対応の差に関しては興味深いものがあったが、今年度に限ったものなので特別には取り上げないことにする。

[1.台湾を通してみる日本]

台湾では街中で多くの日本語や日本製品などを見ることができた。例えば車や原付スクーター、或いはコンビニや食料品などだ。ただし日本と違うのは、単純に日本のものだけでなくアメリカやドイツ、タイなど様々な国の割合も日本以上に高いことである。台湾は宗主国や原住民それぞれの文化を取り込んだ多様性のある社会だからこそ日本と違って受け入れやすいのかもしれない。それでも日本を身近に感じられたので驚いた。

他にも、参加していた複数の講義で外国の例として第 1 に日本が取り上げられていることに驚いた。アメリカが２番目である。特に Intercultural Communication(開講されている講義の一つで文化

間の違いを理解してコミュニケーションを図ることを目的とする)では、台湾に対する習慣の例として主に日本と西欧諸国が頻繁に比較対象とされた。他の国からも留学生が参加しているにもかかわらずだ。それだけ台湾にとって日本は興味関心の対象であり、常に注目されていることが分かった。

[2.英語を通じて広がる視野]

この留学で参加した講義は基本的に英語で行われるものなので、現地学生だけでなく様々な国から学生が集まっている。そうなると講義中の質問も当然英語で行われるわけだが、私はいつも学生のする質問の視点に驚かされた。例えば電磁気学の講義の中で”脳のニューロンは電気を通すこともあれば通さないこともあるのでこれは半導体といえるか”といったようなものがあった。そもそも講義中の学生からの質問数が日本と違い桁違いに多いのだが、それに加えて柔軟な発想を皆持っていてとても刺激を受けた。英語ができれば実際にこれらのアイデアを吸収することができるようになるのだから素晴らしいことだと思う。

物理学実験の講義ではグループで１つの実験を行う形式だったが、特に私が参加したグループは日本人の自分と台湾人、インドネシア人の 3 人であったため必然的に英語でのコミュニケーションが求められた。しかし逆に言えば台湾人ともインドネシア人とも英語さえできればそれぞれ意思疎通ができるのである。当たり前といえば当たり前だが、これはものすごいことなのではないかと思った。当然それ以外の国からもたくさんの学生が来ていたが皆英語でコミュニケーションをとることができた。つまり得られる知識の幅が大きく広がったのだ。まるで情報源が図書館しかなかったときに初めてインターネットに触れたような感覚だった。英語ができれば視野は開けることを改めて実感した。

[3.講義に対する学生の学ぶ姿勢]

今回受講した講義を全体的に見て、日本に比べて議論が活発な傾向があることに気が付いた。学生はわからないことがあれば板書中でも解説中でも気にせずに手を挙げて質問する。講義内容とほぼ関係ない内容でも関連がありそうだと思えば質問する。たとえ全体の流れを遮るとしても。それでも学生一人一人が講義内容に対して理解を深められればそれで講義の目標が達成されるわけで先生もそれらの質問に答える。日本の学校では一般的に良くないと思われるような光景だが、私にはこれが本来あるべき講義の姿であるように感じた。貪欲に学ぼうとする学生とありったけの知識を可能な限り伝えようとする先生と、実際には何も悪くなんてないのだ。これは良い習慣だと思うので日本でもトライしてみたい。

また、日本の世間では留学から帰ってきた学生はよく“海外の学生はみな真面目でよく勉強する”といったようなことを言うが、私には半分正解で半分不正解であるように感じた。割合として真面目でよく勉強する学生は確かに日本より多いが、それ以外は日本と大して変わらないように思う。講義中に寝ている学生もいればスマホでゲームをしている学生もいた。さらには寮の部屋にデスクトップ PC のセットを持ち込んでゲームをしている学生もいた。つまり日本の学生が特別に不真面目で世界的に見て劣っているわけではなく、どこの国でも学生は学生であり、真面目な学生もいれば不真面目な学生もいることがわかった。ただし東華大学では単位をとるための出席要件が厳しかったり考査が 9 割合格だったり、休みが何か月か日本より少なかったりと卒業するまでが厳しいため日本より真面目な学生が多いのも少し納得できるような気もする。

[4.台湾での生活について]

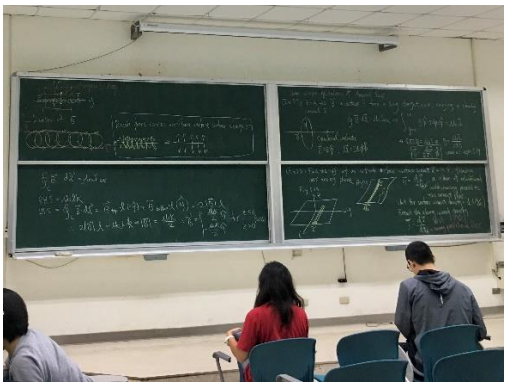
まず驚いたのが、寮のトイレでトイレットペーパーが流せることだ。この留学の２年前に台湾を

訪れたときは詰まる原因になるとして流せなかったのだが、今は場所と紙によっては流せるようだ。ちょうどビニールに入ったティッシュのような１枚ずつ取り出す形式で、十分日本と同じ感覚で使える。ただし公衆トイレに行くとないので注意は必要だ。また、ごみの分別に関しては大学内だからか台湾全体なのかわからないが非常に厳しい。電池、瓶、缶、プラスチック、ペットボトル、紙、廃棄紙など最後のほうになると違いがよくわからないレベルで細かい分別を要求してくる。更にはこれらが回収されるとき、まとめて回収されるのではなく一つひとつ袋の中身を確認して他に分別できるごみが混入していないか手作業でチェックが入る。ほかにも、ごみの関連では使い捨てのプラスチックを減らすような取り組みが日本に比べて盛んにおこなわれていた。例えばレジ袋は１元かかったり割り箸やストローがもらえなかったりする。しかし台湾の人々はよくミルクティーなどをタピオカの有無にかかわらず飲むので、カップと蓋に使われているプラスチックが許されるのかは謎だ。

〈この１か月で見えてきた自分自身の課題について〉

私は日本との違いについては早く慣れることができたので、講義や講義内外での学生との交流に十分集中することができたが、その分成長できた部分や足りない部分が明らかになった。日常会話レベルの会話は十分できることが分かったが、ディスカッションや専門の会話（数式の読み上げ方など）が日本で経験がなかったため非常に苦戦した。また、これらの理由からいくつかの講義をキャンセルして他の講義の履修登録をせざるをえなかったりしたので、英語で専門の会話をする機会のために早めに専門の英語やディスカッション力を鍛えたい。

最後に、佐賀大学と東華大学の関係者、短い期間にもかかわらず快く自分を受け入れてくれた教員と TA の方々に感謝し、日本での学生生活や次のチャンスに活かそうと思う。



講義は板書も含めほぼ全て英語で行われる

海外生活で変わったこと

農学部生物資源科学科１年　内田怜那

私は人生で初めての留学をするにあたっていくつかの目標をたてた。実践的な英語力をつけること、台湾人に親日の人が多い理由を知ること、海外の大学での生活を通して様々な国の人と友達になること、この三つが私の今回の留学に対する主な目標である。佐賀大学でも国際交流の場に参加したり、英語で授業を受けたりしたことはあったが、より密にこれらのことを経験できる東華大学にいって学びたいという思いでこの研修に参加した。

ここからは実際の 1 ヶ月の留学期間で思ったことや気づいたことを述べていこうと思う。一つ目は資源をとても大切にしていることについてである。台湾に出発する前から、台湾は資源を大切にしていて、日本のように買い物のたびにレジ袋はもらえないことは知っていた。しかし実際に行ってみると、何か食べ物をテイクアウトして買った時、店によっては食べる時には必ず使うはずの割り箸やストローももらうことは出来なかった。これは台湾の人が自分専用のものを使うことがあることが理由だと後から分かった。また滞在中に何度も飲んだタピオカミルクティーのお店ではマイボトルを持参すれば安く買える店舗がほとんどで、多

くの現地の人がそのサービスを利用していた。日本でもタピオカはとても流行っているがこのようなサービスはあまりないのでもっと日本でも取り入れたら良いのではないかと感じた。

２つ目は日本の製品がものすごく多く売られていることである。大学の近くには多くの飲食店、スーパーなどが並んでいた。もちろん台湾食を売っているお店もたくさんあったが、同じくらい日式と書かれた日本食レストランがあった。東華大学の近くにある日本食を出すお店にはほとんど行ったと思うが、少し日本とは違う部分もあったものの、味はよく似ていた。どこも人気なお店が多く、日本のことが好きという台湾人が多いのは日本食が一因となっているのではと考えた。

３つ目は自分の英語に少し自信が持てるようになったことである。私は日本で留学生とディスカッションをするとき、自分の英語に自信がなく黙ってしまうことが多くあった。しかしこの研修では多くの授業で英語を使った会話やディスカッションをする機会があり、自分のわかる言葉で何か伝えようとすれば相手も何が言いたいのか一生懸命考えてくれてうまくコミュニケーションをとることができた。私のバディが受けている日本語の授業で台湾の学生と日本について質問を受ける時間があった時、ある１人の学生から「あなたの英語は良いと思うよ！」と言ってもらえたことで自信が持てなかった英語のスピーキングに少し自信を持てるようになったと思う。

４つ目は台湾の学生の授業への姿勢についてである。これは私が東華大学に来てもっとも驚いたことである。私はEnglish learning and Popular Culture という授業を受けていてそこでは自分が思い入れのある曲についてプレゼンテーションを作り、15 分ほどのプレゼンを全て英語でするというものだった。そこでプレゼンをした学生のうちの 1 人が、原稿をずっと見ることもなく自分の言葉でプレゼンしていて、先生からの質問に対しても自分の持つ情報を加えながらハキハキと答えていた。私はそのプレゼンを見て、自分自身プレゼン力も英語力もまだまだ足りていないなと強く実感するとともに、もっと英語の勉強を頑張りたいというとても良いきっかけになった。また多くの授業で先生が学生に向かって何か発言を求めてくることがあったのだが日本のように誰も手が上がらず意見が出てこないことはほとんどなかった。多くの学生が何か質問や発言をしようという意識を持っていたと思う。私は日本人だということで、「これは日本ではどうなの？」と聞かれることが多かったが、ほとんどの場合英語が出てこないというのではなく、自分の考えを持っていないことが原因で答えることが出来なかった。普段から自分の意見を常に持っておくことは英語力よりも先に必要なことなのではないかと痛感した。私が受けたEnglish Oral Training という授業では、とにかく英語を使って話せる様になろうというものだった。日本でそのような授業を受けたことがあるが、大抵は日本人同士で英語を話すことを恥ずかしく思い、結局日本語を使うことが多かった。しかし、東華大学の学生はたとえ全員が台湾人のグループでも積極的に英語を使おうとしていて、中国語で話すことはほとんどなかった。私はこれを見てこの意識の違いが英語力の差にあらわれているのだと身をもって感じた。

私は今回の研修を通して、最初は１ヶ月が長いと思っていたが帰る頃にはもっと長く勉強をしたかったと思うようになった。これは自分が台湾の文化を受け入れてもっと英語で話す力をつけたいと意識が変わったからだと考える。初めは長く時間のある大学生活で何か有意義なことをしたい、海外の友達を作りたい、英語が話せるようになりたいと漠然と思っていたが、留学後の意識がここまで変わるとは自分でも思っていなかった。私は

これから、よりたくさんの国際交流の場に参加して英語力や国際的な視野をもっと身に付けたいという新たな目標ができた。たった１ヶ月の期間だったが普通に春休みを過ごしていては決して得られない貴重なものをたくさん得ることができたと思う。

バディと夕食を食べた日の写真

「充実した一か月」

経済学部経済学科１年　末松栞

私がこのプログラムに参加しようと思ったのは自分の価値観を広げたいと思ったからだ。日本では感じることのできない文化の違いや価値観の違いを見つけ、台湾やほかの国の人との交流をしていく中で普段の生活では感じる事の出来ない日本のすばらしさや悪い面を知りたかった。また、自分の英語力やコミュニケーション能力を日本語が伝わらない状況で試してみたかった。

この留学を通して人と人の繋がりはとても大切なことだということを改めて感じることができた。自分から行動していかないと友達をつくることも、助けてもらうこともできないが、一人友達ができるとすぐ繋がることができてとても楽しかった。また、日本にいたときからバディと連絡を取っていたこともあり、台湾に来てからもスムーズにやり取りを進めていくことができた。台湾の学生とは英語でのコミュニケーションで初めは緊張したが、相手も自分も必死に聞き取ろうとしているのでうまくいかないことも伝えられないもどかしさも乗り越えられた。話が続かず、沈黙が続いて心が折れそうになってしまうことや中国語での会話に入っていけずにおいて行かれることも多々ありましたが、翻訳を使ったり友達の力を借りたりすることでコミュニケーションをとることができた。

東華大学の授業は佐賀大学の授業とは全く別のものでとても刺激的だった。基本英語で行われる授業に参加させていただきましたが、中国語しか理解できない人もいてディスカッションに苦労することもあった。私が一番大変だった授業は Mandarin Chinese という授業で中国語の勉強を様々な国の人と一緒に受ける授業だった。それまでほとんど中国語に触れた事のなかった私にとって中国語は難しく先生の言っていることについていくことができず初回の授業で受けるのをやめるかどうか考えたが、一週間で基本的な発音などを詰め込んで何とか授業についていけるようになり最後の授業には上手に発表することもでき、とても達成感のある授業だった。また、多くの授業でプレゼンテーションが行われており、台湾の大学生のプレゼン能力の高さには驚かされた。英語で行っているにもかかわらず人を圧倒させ、説得させるプレゼンばかりでかっこよかった。グループワークも豊富で一つの決め事をするのにちゃんとディスカッションしていて日本では考えられないと感じた。また、日本への興味を持っていてくれる人が多く授業で日本について聞かれることもあり、日本の社会制度や習慣を改めて考える機会となり、た。

留学を終えて自分の中で言語に対する興味や英語能力の向上意欲がさらに高まった。留学中は日本との生活の違いにストレスを感じることや自分を見つめなおす機会となりとても有意義なものであった。日本の事を好きだと言ってくれる人がたくさんいることは誇らしく、知らない国への興味も強まった。日本にいてはバイトばっかりの日々

で単調でつまらなかったが、台湾に留学して大切なことに気づくことができ自分のなりたい自分に向けて精進していく勇気をもらうことができた。

最後に私たちの留学を全面的に支えてくださった国際課の皆様、団長、副団長そしてお世話になったすべての方に感謝したい。

広大な敷地を自転車で移動する様子

「台湾での生活で感じたこと」

農学部生物資源科学科１年　中山真那伽

最初に、私はこのプログラムに参加することをとても悩んで決めました。私は、高校生の頃から留学をしてみたいという気持ちがあり、大学での目標の一つでした。しかし、いざ、その場面におかれると自分の英語力や初めての海外で、一か月間の滞在であることなど様々な不安を感じてしり込みしてしまっていました。しかし、去年の参加者の報告書や説明会を聞いてやりたいという気持ちが強くなり、参加しなかったら絶対に後悔すると思い参加することを決めました。留学を終えた今言えることは、そこまでハードルが高くないということです。留学することに不安がある人でも少しでもしたいという気持ちがあるならぜひ参加してもらいたいです。

次に私が台湾で生活して感じたことについて述べていきます。台湾に行って気づいたのは思っていたより治安がいいことです。現地の学生は自分のバッグでレストランの席取りをすることもあり、治安は日本と大して変わらないと思いました。しかし、交通の面ではとてもバイクが多かったり、車のスピードが速く、運転が荒かったりしたため注意が必要でした。また、食事の面ではとても苦労しました。基本的に大学を出てすぐのところにある志學通りで食事をしていましたが、最初のほうはどのレストランに入ればいいのか分からず、メニューも中国語で書かれているので困惑しました。しかし、私たちが困っているのを察して英語のメニューをくれたり、日本語や英語で説明しようとしてくれたりしてくれて、台湾の方々の温かみを感じました。

コロナウイルスの影響で大学の始業日が延びてしまったり、帰りの飛行機が欠航になったり予定通りにいかないことがたくさんありました。しかし、そのおかげで例年通りでは知ることができなかった台湾の文化について学ぶことができ、台湾についていろいろな視点で見ることができるとてもいい経験になりました。また、中国語だけで行われる授業や定員が達している授業があったため出発前に作っていた時間割をほとんど変更することになるということもあり、知らない土地で一か月間色々なトラブルがあった中で臨機応変に対応する力を培うことができました。

現地の学生と一緒に授業を受けて台湾の学生の英語力の高さを実感しました。台湾の授業は日本よりも少人数で授業が行われ、グループワークやペアワークをする授業も多かったです。日本の英語の授業は先生が英語で話しても学生は日本語で会話することがほとんどですが、台湾の授業では、授業中は学生同士の会話でもほとんど英語で、中国語は全く聞こえてきませんでした。日本人は英語を話すことに消極的で、恥ずかしく感じてしまう傾向にありますが、台湾人は日常的に英語を使用する環境にあるからこそ高い英語力を持つこと

ができているのだと思うと同時に、日本の英語教育の低さを実感し、改善される必要があると思いました。

また、台湾の学生はとても積極的に喋りかけてくれました。内容は日本についてのことが主で日本に興味を持っている人が多いように感じ、日本の観光地や食事、アニメやドラマについて一生懸命話してくれて、日本を好きでいてくれることがとてもうれしかったです。また、日本語を勉強している学生も多く台湾は親日国であること改めて実感しました。逆に、台湾について知っていることを聞かれたときに答えることができずに留学前に勉強しておくべきだったと後悔しました。

最後に、不安を感じながらの台湾での生活で他の参加者の皆さんに助けてもらいながらも一か月過ごすことができました。今回の留学で自分の英語力がまだまだであることを痛感し、もっと積極的に行動できたはずだという後悔もうまれました。この経験を生かしてこれからもっと英語を勉強し、また留学に挑戦したいです。

グループでの発表風景